

眼差しを未来に向けよ

上^{うえ} 廣^{ひろ} 榮^{えい} 治^じ

平成十年も暮れようとしております。それにいたしましたとしても、人間というものの愚かしさばかりが目立った二年間でありました。海外では、テロと報復攻撃、核実験、北朝鮮のミサイル問題、大統領の不倫騒動、アジアやロシアの経済危機、国内でも、金融危機と政治の混乱、防衛庁の不祥事、連続する毒物混入事件と保険金犯罪……数え上げればきりがありません。

それでもう一つ、現代人のいい加減さ、愚かしさを示したのが「二〇〇〇年問題」でありました。現在作動しているコンピュータ・プログラムが、日付の西暦を下^{しも}二桁^{けた}で読み取っているという問題です。例えば一九九八年の場合、「九八」と読み取れば自動的に「一九」が頭について「一九九八」となる。ところが、「二〇〇〇年」になると、「〇〇」を讀んで「一九〇〇」か「二〇〇〇」かの区別がつかなくなってしまうというのです。

この下二桁のプログラムは、発電所や病院、工場の機械設備にはじまって、私たちの家庭にあふれて

いる家電製品や車にまで使われているというのですから厄介やっかいです。二〇〇〇年までにすべての修正を行なうことはとても不可能だから、経済活動や社会生活に大きな影響を与えることになるというのです。

それにしても、このプログラムが標準化されたのはたった二十年前のことです。なぜそのときに、二〇〇〇年になつたら、と考えなかつたのでしょうか。あるいは考えはしたけれど、四桁を二桁に縮めるほうが、とりあえず効率的で経済的だということになつたのでしょうか。

気づかなかつたのであれば、人間はなんと愚かなものでありましょう。また、もし気づいていて、しかもなお、将来の問題よりも、今の効率や経済性が優先されたのであれば、人のすることはまず疑つてかからなければなりません。ビルも橋も原発も自動車も航空機も、効率と経済性のために、どんな手抜きをし、安全性を犠牲にしているのか知れないからです。

今年亡くなつた黒澤明監督は、一切の妥協を許さない完璧主義者だと言われていました。一九五一年に『羅生門』がヴェネツィア映画祭でグランプリを受賞したのをはじめ、『生きる』や『七人の侍』も国際的な賞を受賞しています。妥協も手抜きもない、予算と効率を無視して技巧を凝らした映画作りが、世界の称賛を浴びたのです。その結果、黒澤監督は、外国人のもつ日本のイメージを「フジヤマ、ゲイシャ」から「クロサワ、ソニー、ホンダ」に変えたと言われました。

ところで、このソニーとホンダは、なぜ黒澤監督と並び称されたのか。ソニーもホンダも、黒澤監督と同様に、当時の欧米のメーカーが想像もしなかつた高次の目標を掲げて、妥協することなく目標を追い、しかもこれを実現したからでありました。いずれも、目先の効率や現実の困難に流されることなく、目標のために今日できる限りの努力を重ね、世界の信用を勝ち取つたのです。

この一年間に取り沙汰された事件を思うにつけ、私はクロサワ、ソニー、ホンダのような、遠大な目

標を持つこと、言い換えれば「大きな夢を持つことの大切さ」を考えるのです。短絡的に、現実には流されることの愚かさを思うのです。

一連の犯罪も、不祥事や証拠隠しも、金融危機の騒動も、いずれも目先の利得だけを見て、未来を見ることがない、短絡的な行為でありました。目先の金や現実回避のために、てっとり早い暴挙を行なう。不安だから貸ししぶり、首を切り、事業を縮小撤退する。十年二十年先の未来を見ずに、小手先の弥縫びほう策に右往左往する。これでは、十年後はおろか、一年後には破綻に至ってもなんの不思議もありません。目先の利得や現実回避にとらわれて、現実には破綻に至ってもなんの不思議もありません。歩き回るようなものです。何につまずき、ぶつかるか知れたものではありません。

一方、将来の夢や目標を持って進むのは、前方の灯あかりを見て道を歩むのに似ています。たとえ足元は暗くても、進むべき方向と、いま為すべきことが、ありありとわかるからです。

人の人生からみれば、今現在の得失など、しごく小さなものに過ぎません。新しき年を目前にして、今年一年の愚かしい事件を思うにつけ、私たちは大きく方向を転換すべきだと思います。十年後二十年後を見据えた目標を定め、確固として歩み始めるべきだと思います。たとえ今が苦しくとも、来るべき未来を信じて、歩一步と夢の実現に向けて、努力を尽くすべきではないか、私はそう思うのです。

その夢の内容は、一人一人、あるいは家族ごと、会社ごと、国ごとに異なるでしょう。しかし、それぞれの夢がどのようなものであれ、それは倫理の大道の上にあるであろうと、私は信じております。

黒澤監督は人々に感動を与え得る映画を作ろうといたしました。ソニーもホンダも万人に喜ばれる製品を開発して名声を得たのです。「万人の幸福」とは、まさに倫理の目指すところであります。すなわち、三者三様の夢は、いずれも倫理の大道の上にあったと申してよからうかと思えます。

とりわけ子どもたちには、家庭でも学校でも夢を育てあげて戴きたいと思えます。未来を担う子どもたちこそ、大いなる希望と気概をもって、夢の輝きに導かれて、歩んでもらいたいと願うのです。

戦後の半世紀余り、教育はただ一つの答えのみを正しいと教えてきました。偏差値教育と受験戦争の下では、あらかじめ定められた正解以外は、決して許されることがなかったのです。どんなに独自の考えを拓こうと、決まりきった解答以外は認められなかったのです。かくして、私たちは夢を持つことを忘れました。自分なりに、真摯に考えてみようとする習慣を奪われて、マニュアルに頼り、目先の対応ばかりを優先するようになってしまったのです。

夢がなくなったのは、現代社会が閉塞的だからだといわれます。科学が発達し、社会が高度化したために、個人にできることはほとんどなくなってしまったというのです。もちろん、そんなことはありません。技術の最先端をゆくコンピュータでさえ、「二〇〇〇年問題」のごとき、およそ初歩的なところで大混乱を来しているのが現状なのです。この一年の愚行の数々もまた然りです。科学も社会も、子どもたちの未来に期待される場所は限りなく大きいのです。

一昨年亡くなった司馬遼太郎さんは、嘗々と海を干拓し国土を拓いたオランダを旅したとき、有名な大堤防の上の記念碑に「将来を立てなければ民族は亡くなる」とあるのを見て、感銘を受けたと言います。目先の現実にとらわれ、夢や目標を忘れたとき、その社会は確実に衰退へと向かうのです。

言うまでもなく私たちは、倫理社会の実現という大きな夢を持って共に歩んでおります。とはいえ、私たちもまた愚かな人間です。迷い、疑い、誤ることも多いであります。

が、しかし、倫理という大きな灯火を掲げるかぎり、私たちは大きな過ちに陥ることはないでしょう。なぜなら、私たちの眼前には、倫理の大道が明々と照らされてあるからです。